

# 外国語活動・英語活動を通じた大学と小規模小学校との連携 —授業支援、学習教材の製作を通して—

## Cooperation between a small elementary school and a university through foreign-language activities: the support of lessons and collaboration on English learning materials creation

杉浦 香織  
文化政策学部国際文化学科

Kaori SUGIURA  
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

マーク D. シーハン  
文化政策学部国際文化学科

Mark D. SHEEHAN  
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿では静岡文化芸術大学の教員、及び、学生（教職課程履修者や英語に関心のある学生）と地域の小規模小学校との外国語活動・英語活動を通じた連携とその成果について報告する。2011年度より小学校において外国語活動が必修となっている中、静岡文化芸術大学が地域に根ざす大学として、学部・学科の専門性を生かし、地元小学校からの外国語活動実践支援に関する要望に応えることは極めて重要である。さらに、本学生にとっても講義で学んだことを、実社会で生かすことができる貴重な経験となる。連携方法は、新学習指導要領に則った授業案作成の支援、大学教員による研修開催、小学校教員と学生によるチーム・ティーチング(T-T)、大学教員または学生による授業実践であった。本連携がきっかけで、英語学習教材の共同製作・ワークショップも開催されるなど、着実に小学校と大学教員間の連携が強まっている。また、児童や学生にとっても本活動が有意義であることがアンケート結果からも見て取れる。横山小学校と静岡文化芸術大学の外国語活動・英語活動を通じた連携は、2012年度で4年目を迎え、双方にとって教育効果のある支援・交流を継続している。

This paper reports on the cooperation between a small elementary school and students and teachers at Shizuoka University of Art and Culture through foreign-language activities (*Gaikokugo Katsudo*) and English activities. This cooperation is meaningful for both schools: the elementary school needed the support on how to conduct foreign-language activities, as it wanted to provide this educational opportunity to their students to foster their communication skills by having them interact with various types of people in society. For the university, it was an opportunity to support a school in the community with its educational resources. Also, the university students benefited from putting what they learned in their studies into practice. The collaborative effort included support in making lesson plans, lectures provided by university teachers, team-teaching by elementary school teachers and university students, university student participation in communication activities, and lessons conducted by university teachers or students. Furthermore, this partnership helped the participants create English learning materials including CDs and a text; a workshop was held for elementary school teachers that presented information on the use of the materials and other teaching methods. This paper concludes that the cooperation has been successful, with the style of the cooperation changing according to the needs of the participants.

### 1 はじめに

本稿では静岡文化芸術大学の教員、及び、学生による浜松市立横山小学校との外国語活動を通じた支援・交流について報告する。外国語活動は2011年度より小学5、6年生において必須となっているが、本支援・交流は外国語活動実施の移行期間である2009年度に始まった。2009年度当初、大学の役割は、担任による5、6年生対象の外国語活動実践支援であったが、2010年度より、1年生から4年生を対象に、英語活動を通じた交流も行っている。なお、交流活動は年3回程度である。

連携初年度の2009年度、横山小学校は外国語活動の実践研究事業指定校（詳細は2.1.3を参照）となり、小学校教員は外国語活動の実施方法や教材の活用方法についての助言を必要としていた。また、同校は、小規模校で児童の絶対数が少ない。そのため、児童のコミュニケーション能力を育てる機会を増やすことも必要としていた。これらのニーズに応えるため、地域の教育資源である静岡文化芸術大学の教員と学生が外国語活動を支援・実践することは意義があると考えた。

一方で、中学校・高等学校の英語教員を志して勉強する静岡文化芸術大学の学生が小学校の授業に参加し、教育現場を体験すること、また、国際関係、多文化共生、第二言語習得などを専門として学び、英語力向上にも力をいれて

いる静岡文化芸術大学の学生が、蓄えた知識やスキルを実社会で生かすことは大変有意義だと考えた。

以下、横山小学校の紹介、連携の経緯、支援・交流方法の実際、支援・交流から発展した英語学習教材の製作プロジェクトについて報告する。

### 2 横山小学校について

#### 2.1 所在地

浜松市天竜区横山町にある浜松市立横山小学校は、浜松市内から電車で30分乗車後、自動車で約15分のところに位置する。学校は天竜川と山に囲まれ、豊かな自然に恵まれた環境にある。

#### 2.2 児童の実態

2012年度的全児童数は27名（2011年度は26名）で、複式学級の学年もある。児童は、大変素直で元気である。昼休みは、学年を交えて仲良く運動場で遊んでいる。教員によると、児童は幼稚園以来からの仲間であり、互いのこと、また、その家族のことを大変良く知っている。

英語活動や外国語活動の実際では、認知的に発達しはじめた3、4年生が、一番積極的な傾向にある。高学年になると恥ずかしいという気持ちが先行するのかが、活動（特に発声活動）の際、多少の消極さ見受けられるが、活動自体

には大変一生懸命取り組む。

### 2.3 外国語活動への取り組み

横山小学校の外国語活動への取り組みは、2009年度、文部科学省の「外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方などに関する実践研究事業（平成21年度）」、2010年度は浜松市の「外国語活動実践研究事業（平成22年度）」の指定校」の助成を受けて進められてきた。教職員数が少ないからこそ可能になる団結力と機動力を生かし、研究主任を中心に有意義な研究実践が行われていた。

## 3 連携の経緯

前述したように2009年度、横山小学校が文部科学省の外国語活動に関する実践研究事業の指定を受けた。それにあたり、横山小学校から静岡文化芸術大学に要請があり、連携が始まった<sup>1)</sup>。2010年度は、横山小学校が浜松市の実践研究事業の指定を受け、継続して協力を行った。主な支援方法は、授業案作成の支援、研修における静岡文化芸術大学教員による講座、小学校教員と学生によるT-T授業実践、授業におけるコミュニケーション活動時の教員・学生による参加、等であった。

また、筆者らが、2010年度に静岡文化芸術大学学部長研究費（「小学校外国語活動を指導する教員の資質向上のための教材製作：教室英語と『英語ノート』における表現の口頭練習CD」）を得て、横山小学校の協力のもとに、小学校教員を対象とした英語口頭表現練習のための学習教材（CDおよび冊子）を製作した。また、製作した教材を用いて、小学校教員の英語学習を支援するワークショップを、横山小学校の協力を得て開催した。

これらの流れを受けて、2011年度は静岡文化芸術大学学部長研究費（「大学生による地域の学校支援活動の組織化に関する研究」の一環）、2012年度はイベント・シンポジウム等開催費（「小学校外国語活動支援：学生による国際理解のための英語（外国語）授業実践」）の助成を得、連携を続けている。2011・2012年度は、5,6年生の外国語活動だけでなく、1から4年生を対象にした英語活動の授業実践を、大学教員・学生が中心となって行っている。

以上のように、本連携は、研究事業の指定を受けた小学校における外国語活動の支援として始まり、現在は外国語活動・英語活動を通じた全児童との交流に至っている。連携の在り方は変化しているが、双方の教育の充実を図るために、実践可能な方法で交流を続けていることが大事だと考えている。次節では、具体的な支援・交流方法について紹介したい。

## 4 支援・交流の実際

### 4.1 大学教員の専門知識を生かした支援

2009・2010年度は、大学教員による支援として、小学校の研究主任が作成した授業案における授業展開や自然なダイアログ作り等に関する助言を行った。2009年11月には、小学校の校内研修にて、大学教員が、児童用の英語教材について（勝浦範子教授：当時）、英語の音

声仕組みや、授業に活用できる口頭練習方法等（杉浦）についての講座を実施した。

### 4.2 授業支援

#### 4.2.1 担任中心の授業における学生ボランティアの活用

上記同様、2009・2010年度を中心に行った、静岡文化芸術大学の学生ボランティアを活用した授業支援について説明したい。下記に示す授業例は、外国語活動の目標<sup>2)</sup>のうち、「外国語を通して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ること」に重きを置いたものである。教員志望かつ小学校で英語活動ボランティア経験のある学生1名が、モデルダイアログの提示のためにロールプレイを担任と行い、その後、口頭練習としてチャンツを中心に実践した。その他の学生は、児童が学生に慣れるためのアイス・ブレイキング活動や授業終盤のインタビュー活動に参加した。

このような授業実践の支援をするために、事前の打ち合わせを小学校の研修主任（6年担任）、大学教員、学生も交えて行った。特に、児童の実態や普段の授業展開を聞きながら、どのように学生が参加したら授業が円滑に進み、クラスが良い雰囲気になるのか、また、一方で、学生にとって意義のある経験になるのか、ということを話し合った。このようにして、右記の授業案を研修主任と大学教員が共同で作成した。授業案に記載されている活動についてまず説明したい。

#### キーワードゲーム

単語やアルファベットの定着のための活動。例えば、食べ物に関する単語で行う場合、学習する単語中、教師がキーワード（例 orange, apple）と決める。児童は、4、5人の組になり、机の真ん中に消しゴムを置く。教師が言った単語を児童は繰り返して言い、手を2回たたく。これをしばらく続けていく。教師がキーワードを言った場合、児童は手をたたき代わりに真ん中においてある消しゴムを争奪する。

本授業では、児童と学生の間緊張感を軽減するためのアイス・ブレイキング活動として実践。本活動は担任による通常の外国語活動でもよく実施されており、児童にとって親しみのあるゲームである。

#### ロールプレイ：モデルダイアログ（一部抜粋）

担任と学生のロールプレイにおけるダイアログである。大学生と担任のやりとりが、児童にとっては印象深いと考えた。ロールプレイは英語母語話者の Assistant Language Teacher が来た際に実施しているようで、児童に親しみのある活動である。

担任（児童役）: Hi. My name is (Hiroyuki). Nice to meet you.

学生 N（児童役）: Hi. My name is (Hitomi). Nice to meet you too.

担任: I like ~. Do you like ~?

学生 N: Yes, I do. / No, I don't.

担任: I don't like ~. Do you like ~?

チャンツ

Do you like apples? Yes, I do. のフレーズを、食べ物の種類を、次々に変えながらリズムに合わせて歌う。チャンツを歌う前に、食べ物に関する単語の言い方を、教師の後について十分に練習してからチャンツに移行することが大切。

本授業では、コミュニケーション活動においてスムーズな言語産出を促すために、十分な口頭練習を楽しく行う事を目的とした。

4.2.2 成果

児童の声

- ・初めて会った学生さんの自己紹介であまりいっていることがわからなかったけど、交流していくうちにちゃんと話せたので楽しかったです。
  - ・(好き嫌い調査で) はじめは緊張したけど終わったときは全然緊張感がありませんでした。外国へ行っても勇気を出してあいさつしたいです。
- (横山小学校 HP より)

学生の声


- ・私はあえて自分から行くことはしなかったけれど、児童のほうから来てくれて嬉しかった。英語も上手に話せていた。ただ、話しているときに目を見て話すことができ

参加者：5年生 14名、6年生 12名（別々に実施）/ 担任、大学教員（2名）、学生（4名）

ねらい：(1) 人と関わることに楽しさを感じる。

(2) 積極的に声をかける。

(3) I like, I don't like, Do you like などを使用して自分のことを伝える。

過程	教師・学生の活動	児童の活動	備考
自己紹介	自己紹介  My name is ~ . I am from ~ . I like/ I do not like	・自己紹介を聞く	
アイス・ブレイキング	キーワードゲーム  (1) 説明 (2) ゲーム開始	・大学生を交えて 3-5 人のグループで活動	◆学生が自己紹介で用いた絵を使用。 ・児童が慣れているゲーム活動で、学生との交流に対する児童の緊張感をほぐす。
導入	チャンツ  Do you like apples? T2 学生中心	・手拍子をしながら歌う	◆視覚・聴覚教材の提示 ・機械的練習により口ならしをさせる。
展開	好き嫌いを調査  (1) ロールプレイ： モデルダイアログ (T1 担任 -T2 学生) (2) 活動カード配布 (3) 口頭練習 (4) インタビュー活動 (5) インタービュー結果	・モデルを聞く ・好き嫌いを記入 ・ペアで練習 ・インタビュー ・結果を報告  	◆視覚・聴覚教材の提示 ・本物のコミュニケーションを想定。 ・英語表現を安心して使えるようステップを踏んだ練習。 ・教員・学生による児童の支援。 ・T1 による児童の活動の評価。
まとめ	あいさつ	・あいさつ	



たらもっと良いのではないかと感じた。

- ・児童 1 人 1 人が積極的に話しかけてくれ、英会話らしい反応をしていたことが一番印象に残っている。
- ・なるべく英語で会話をし、日本語は交えないように心がけた。時々、児童が学習していない英語で伝えても（カードに名前を記入するスペースがもうないなど）状況を理解してくれていたように感じた。

以上の感想より、児童は人と関わることに楽しさを感じ、積極的に声をかけようと努力していたことがわかる。また、自分の伝えたいことを伝えようとしていたことも伺える。このように学生の授業への参加は、授業目標を達成する上で多に貢献していたと伺え、本授業のような支援方法はおおむね成功だったと言える。

### 4.3 大学教員による授業

#### 4.3.1 授業実践内容

外国語活動指導要領 3 本柱の中の 1 つである、「外国の言語や文化について体験的に理解を深める」の一環として、英語母語話者の大学教員による授業実践も行ってきた。下記に挙げる例は、担任の提案で、『英語ノート 2』（文部科学省が作成した外国語活動のための補助教材）の Lesson3 と関連づけた「アメリカの文化的年間行事」に関する授業を大学教員（シーハン）が行った。（図 1、図 2）事前に担任により行われた Lesson3 にて、児童は日本の伝統的な行事について色々調べていた。そのため、大学教員による授業において、児童はアメリカの行事や祝日（例 Christmas, New Year's and Valentine's Day.）について、日本の行事と比較しながら学ぶことが可能になった。また、授業では、児童が行事に関連する単語を、付随的に学ぶことができるようなゲーム活動も取り入れた。以上のような工夫をし、「外国の言語や文化について体験的に理解を深める」ことができる授業となった。授業は、ほぼ英語での実践であるため、児童の授業に対する不安を軽減、内容理解を促進するため配慮をした。具体的には、スライドに豊富な写真や絵を組み込むこと、ジェスチャーを交えたティーチャートーク、さらには、ゲーム活動等を行った。

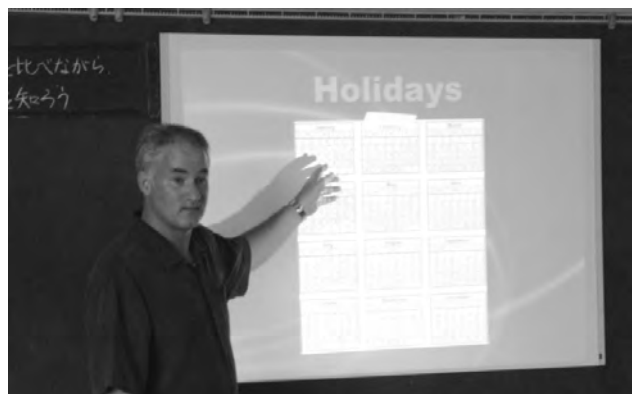


図 1 スライドを利用した授業の様子



図 2 アメリカの行事についてのスライド（一部抜粋）

#### 4.3.2 成果

- ・年数回の訪問のため、1 回の授業でも十分な文化的な刺激を与えることができる授業実践が必要であると考えられる。その観点から、アメリカの文化について、英語母語話者から英語で学ぶことができたのは意義があると思われる。
- ・今回のような単発的な訪問による授業でも、小学校側と連携することで、訪問による授業が学級担任による事前の授業とつながり、児童にとって、より意義ある授業となったと言える。

### 4.4 学生による授業実践

#### 4.4.1 授業実践にあたって

大学教員による授業や、学生ボランティアによる授業補助だけでなく、学生が中心となった授業実践も、2011 年度以降、行われるようになった。学生が主導になって授業実践するということは、大学で学習していることを実践できるという点で大変貴重である。授業実践内容については大学側に任されているが、その分、授業実践をする大学

側の責任も大きいため、学生への事前指導として配慮する必要がある。以下は、事前指導の際に配慮している主な事項である。

- (1) 外国語活動の目標について認識させる  
 学習指導要領における外国語活動の目標について説明する。教職課程必修・選択科目の講義のみならず、事前にも、外国語活動の主旨を学生に伝える。
- (2) 第二言語習得について一定の知識を与える  
 講義を通して第二言語習得のメカニズム等を正しく理解させる。特に臨界期前の学習者が第二言語を学ぶ際の特徴についての知識を得てもらう。
- (3) 授業以外での児童との交流の大切さを理解させる  
 昼やすみの時間を利用して、児童との交流を深める大切さを伝える。授業以外の場で児童と触れ合うことは、学生を安心な存在と感じさせることだけでなく、学生にとっては、児童の理解にもつながる。これらは授業をスムーズに行う上で、重要であることを理解させる。

#### 4.4.2 授業実践内容

下記は、横山小学校を訪問し、授業実践する際の1日のスケジュールである。大学生は、低学年・中学年・高学年のそれぞれにおいて授業実践をする機会を得ている（前節で述べたような授業を大学教員が行う場合もある）。授業案作成については、学生の意見を尊重しながら、大学教員と共同で作成している。次頁に5,6年生を対象に行った授業実践の1例を紹介する。新学習指導要領、外国活動の目的のうち、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」の前半の部分に重き、ストーリーテリング（絵を見せながらお話を読み聞かせる）を中心に据えた授業を行った。ストーリーテリングの事前には、登場人物や使用される単語に慣れ親しむ活動を実施し、事後には、話の内容と児童の経験に結びつけながら、無理のない程度で産出活動を行った。

横山小学校訪問時のスケジュール




時 刻	○=活動内容 ※ =備考
～10:00	○ 文芸大先生・学生 横山小着 ※ 文芸大の先生と学生の控え室は、1F校長室（会議室）です。
10:15～11:00	○ 3校時・・・1・2年生「ハッピーワールドタイム」 ※ 2F1年教室で行います。
11:10～11:55	○ 4校時・・・3・4年生「ハッピーワールドタイム」 ※ 2F3・4年教室で行います。
11:55～13:30	○ 昼食・休憩 ※ 小学生は給食、昼休み（当日はロング昼休み、清掃なし）です。 よろしかったら、子どもたちと一緒に活動してください。
13:30～14:15	○ 5校時・・・5・6年生「外国語活動」 ※ 2F5・6年教室で行います。
～14:30	○ 文芸大職員・学生 横山小発

参加者：浜松市立横山小学校 5,6 年生 7 名

内容：A New Dog ( Oxford Reading Tree ) を使ったストーリーテリング

ねらい：

- (1) 日本語と絵の補助を得ながら、英語で聞いたストーリーを理解することができる
- (2) 犬の特性に関する形容詞 (big, little, strong, happy, smart, shy) の意味を聞いて理解することができる
- (3) 形容詞を用いて自分の欲しい動物について英語で表現できる (I want a small snake.)

過程	児童の活動	教師の働きかけ
<p>(学生 H)</p> <p>導入</p> <p>15 分</p> <p>★絵本にでる犬に関する形容詞を練習</p> <p>★ペットに関する背景知識を活性化</p>	<p>(1) 自分のペットについて言う</p> <p>(2) 絵カードを見ながら、教師の後に続いて形容詞を発音する</p>  <p>(3) カルタゲーム：形容詞の学習 各グループ 6×3 セット=18 枚 ・日本語で聞いてとる ・英語で聞いてとる ・英語で聞いて英語で言ってとる</p>	<p>(1) ペット (犬など) について児童に聞く Do you like dogs?, Do you have a dog? What's her name? Is she a big / small dog?</p> <p>(2) 6 枚の絵カードを 1 枚ずつ読みながら張って発音練習させる</p> <p>* 形容詞 (big, little, strong, happy, smart, shy)</p>  <p>(3) カルタゲーム ・児童と学生を 3 つのグループに分ける (4 人組位)</p> <p>* 日本語で言う - 英語で言う - 英語で言う * 各チーム、一番多くとった人に拍手</p>
<p>(学生 I)</p> <p>展開</p>	<p>(4) ストーリーテリングを聞く ・話を聞く ・ページをめくるときに一斉に声を出す「バウワウ」(犬の鳴き声)</p>  <p>・教師からの問いかけに答える ・リピートする ・欲しいペットについて英語で答える</p>	<p>(4) ストーリーテリング</p> <p>・登場人物の紹介 Biff, Kipper, Chip, 子ども達の名前 ・絵本を読み聞かせる (1 回目) Today, we are going to read this book in English. The title is a new dog. * センテンスは 2 回繰り返して読む * センテンス以外に、絵から想像できることを英語で聞く * 児童のことにも結びつけながら ・CD を流してリピートさせる (2 回目)</p>
<p>(学生 H)</p> <p>まとめ</p>	<p>(5) 欲しいペットについて ・ I want to _____</p>	

#### 4.4.3 成果

- ・授業実践に興味関心をもっている学生が主に実践していることもあり、児童の反応を見ながら授業ができていた。特に、授業案通りに進まない場合でも、臨機応変に授業を修正しながら実践できていた点がよかった。このように、実際の授業では、予期せぬ事が生じたり、思うように進まないことが通常である。今回はそのような経験ができるよい機会になったと言える。
- ・児童は事後アンケートにて、おおむね、お話の内容を理解できたと答えていた。よって、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」という目標は、ある程度達成できていたと思われる。

### 5 英語学習教材の製作

#### 5.1 経緯

横山小学校との交流を重ねて行く中で、児童が生き生きと外国語活動で活動するためには教師が率先して英語を話し、児童と共に英語活動を楽しむことが大切であるということ、教師が自信を持って授業運営を行うためには、教師自身が基礎的な英語に慣れ親しむことは大切ではないか、ということが話題となった。そこで、教師が気軽に楽しく、英語表現力や発音を向上することができる教材製作は意義あるものではないかということで互いが合意し、2010年度、CD付教材製作の企画・実行に至った。本プロジェクトは小学校の研修主任の協力を得ながら、静岡文化芸術大学の勝浦範子教授(当時)が中心となって行われた。

#### 5.2 教材について

製作した教材(図3)の特徴を下記にまとめる。

##### (1) 対象:

小学校外国語活動に携わる方で、英語の基礎を振り返りたい方。

##### (2) 内容:

- ・『英語ノート』との関連表現について示し、授業に反映しやすいような配慮がされている。
- ・2部構成でPart1「ニューヨーク編(旅行での会話)」Part2「浜松編(ALTとの会話)」。英語だけでなく文化についての知識も学ぶことができる。
- ・ダイアログや場面は、小学校教員の意見を反映し、実践でも使用できるように工夫。
- ・相手の返答に応じた表現が学習できるように、ダイアログにバリエーションを持たせている。

##### (3) 仕様:

- ・日本語のナレーションが入っているので通勤電車や車でも気軽に、楽しく聞くことができる。
- ・写真を豊富に使用し視覚的にも楽しむことができるよう工夫。

本教材は、浜松市立横山小学校の教職員の皆様、ワークショップ(詳細下記)に参加して下さった皆様、静岡新聞に掲載された本教材製作に関する記事を見て希望された方々、県総合教育センター、静岡文化芸術大学の学生、教職員など、約300部、配布された。

#### 5.3 成果

教材について、使用後のアンケートを30部程度回収した。アンケート結果における記述部分の一部を紹介する。

##### 1) お気づきになった点がございましたら、ご自由にお書きください。

- ・とても細かいところまで配慮されたテキストで良いと思った。
- ・会話のバリエーションがいろいろとあって英語に慣れない人にとってはわかりやすい内容だと思う。
- ・自分の住んでいるところを、発信していくことは大切なので地元編があるのがよい。
- ・写真が多く視覚的に大変捉えやすく興味深いテキストだった。
- ・ナレーションがラジオのDJのようで良かった。
- ・続編を期待する(多数)。

##### 2) 今後どのような教材があるとよいですか。

- ・ALTとの授業のやり方を話し合うときにどんな英文で話したら良いかももう少し詳しく、具体的な内容を知りたい。
- ・子どもたちへの指示の仕方が手軽に身に付く教材があるとよい。
- ・英語のスキルアップはさることながら、日々の実践にすぐ役立つノウハウを身につけたいと感じている。
- ・チャンツ集があっても面白いと思う。子どもたちと先生が交替にチャンツをしながら英語の授業を行っているようなものとか。
- ・英語の歌があってもよい。
- ・授業中のT-Tの場面、授業後の授業評価場面などがあるとよい。

以上のアンケートより、本教材の特徴が、ある程度評価されていることがわかる。一方で、今後期待する教材として、現場で即利用できる表現や活動に焦点をおいたものが望まれていることもわかった。

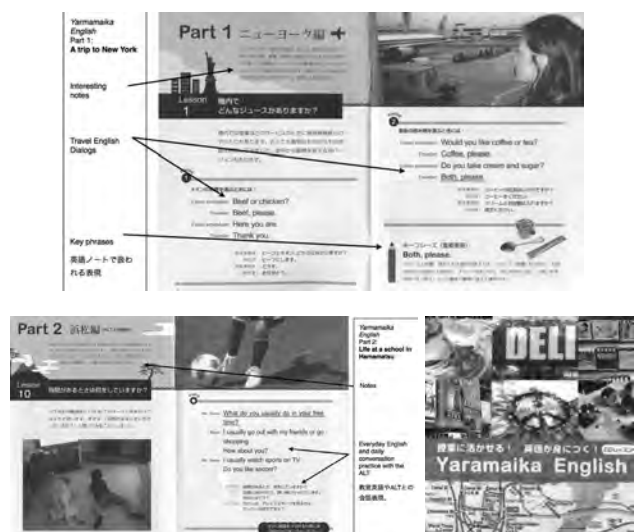


図3 製作した教材:『授業に活かせる! 英語が身につく! Yamaika English』



## 6 英語ワークショップ

### 6.1 開催内容

2011年3月5日、静岡文化芸術大学にて、製作した教材を用いた小学校教員に対する英語ワークショップを開催した。テーマは、「小学校教員のための英語学習ワークショップ教師用英語学習CD教材『授業に活かせる!英語が身につく!Yaramaika English』で効果的な英語学習」であった。開催にあたっては、静岡県教育委員会、浜松市教育委員会の後援、浜松市立横山小学校の協力を得た。当日は、静岡県下から50名ほどの方が参加し、製作した教材の効果的な使い方について、実践体験してもらう講習を実施した。

### 6.2 成果

下記にアンケートに記述された参加者の感想の一部を紹介する。

- ・英語に接する機会を設けていただき、その後、通勤の車の中で聞くようにした。無理がないので(練習が)毎日続いている。
- ・授業に活かせるという、ワークショップのほうが良いかもしれない。小学校教師に英語運用能力を身につけることを全面に出した研修はあまり効果的ではないように思う。

外国語活動に関するワークショップで、「教師の英語力向上」を強力に推進することは、教師の負担となり、必ずしも好ましいことではないだろう。しかしながら、今回のワークショップは、現場の先生の声から実現したものであったということ、大学卒業後ほとんど英語に触れておらず、外国語活動実践に不安な先生方にとって、英語の再学習を促すきっかけとなったこと、また、英語に関心を高めていただく機会であったこと、という点で意義があったと考える。

## 7 まとめ

本稿は、静岡文化芸術大学と浜松市立横山小学校の外国語活動・英語活動を通じた連携について報告した。具体的には、大学教員による専門的助言、学生ボランティアによる授業参加、大学教員や学生ボランティアが中心となった授業実践、小学校教師を対象としたCD付き英語学習教材の製作とワークショップ開催について紹介した。2009年度に開始した横山小学校と静岡文化芸術大学の連携は、5,6年生対象の外国語活動の支援という形から出発し、現在では全学年を対象に広げ、外国語活動・英語活動を通じた交流活動となっている。概観してきたように本連携は、双方の教育充実を図る有意義な機会として継続できている。これは、横山小学校の教職員の皆さんの教育に対する

熱意、臨機応変な対応・機動力、そして我々の訪問を快よく迎えてくださる温かさのお陰である。

今後も、本実践の経験を生かし、微力ではあるが、静岡文化芸術大学が地域の学校教育の支援をしていくことができればと考える。

### 謝辞

本実践は、2009・2010年度浜松市立横山小学校の研修主任(6年担任)であった二橋宏之教諭(現・静岡県立観音山少年自然の家指導主事)の大変な熱意、2011年度より5,6年担任の中谷勝久教諭のご協力、また、元・浜松市立横山小学校小出一人校長、現・関塚壽恵彦校長、元・山下勝久教頭(現・浜松市立城北小学校教頭)、太田直哉教諭、また、全教職員の皆様方の多大なるご理解・ご協力があったなし得たことです。ここに記して感謝申し上げます。

また、2009年度、横山小学校での授業実践において数々の助言をくださり、教材製作においては、中心となって完成まで導いてくださった元・静岡文化芸術大学の勝浦範子教授に、心より感謝申し上げます。学生ボランティアとして本交流活動に協力してくださった、静岡文化芸術大学の教職課程(英語)の学生のみなさん、杉浦ゼミのみなさん、にも感謝の意を表したい。

本実践は、2010年度の静岡文化芸術大学学部長研究費(「小学校外国語活動を指導する教員の資質向上のための教材製作:教室英語と『英語ノート』における表現の口頭練習CD」)、2011年度の静岡文化芸術大学学部長研究費(「大学生による地域の学校支援活動の組織化に関する研究」の一環)の支援をうけて行われた。2012年度も、イベント・シンポジウム等開催費(「小学校外国語活動支援:学生による国際理解のための英語(外国語)授業実践」)の助成を受けて、交流活動を継続できていることに感謝する。

### 注

- 1 当時、教職課程担当の勝浦教授が引き受け、筆者らは、協力者として参加させていただいた。
- 2 外国語活動の目標は、外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う(2011年全面実施新学習指導要領より)、という3本柱により構成されている。

### 参考文献

- 「文部科学省 新学習指導要領生きる力第4章外国語活動」  
 <[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/gai.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/gai.htm)>(2010/09/10アクセス)  
 「浜松市立横山小学校 HP」  
 <<http://www.city.hamamatsu-szo.ed.jp/yokoyama-e/>>(2010/09/12アクセス)